

小型船漁業者としての独立の道 ～雇用型漁業者から独立型漁業者へ～

鴨川市漁業協同組合
北澤 直諒

1. 地域の概要

私の住む千葉県鴨川市は、房総半島南東部、太平洋側に位置し、岩礁域と砂浜域とで構成される美しい海岸線（日本の渚百選）から丘陵地帯に至るまで、変化に富んだ豊かな自然環境がある（図1）。主な産業は、農業、漁業および観光業である。農業では稲作が盛んで「長狭米」というブランド米の他、東京から一番近い棚田「大山千枚田」がある。観光では、全国的にも有名な鴨川シーワールド、日蓮聖人ゆかりの史跡などがある。このように鴨川市は温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、サーフィン等マリンスポーツを理由とした都市部からの移住者も多い。

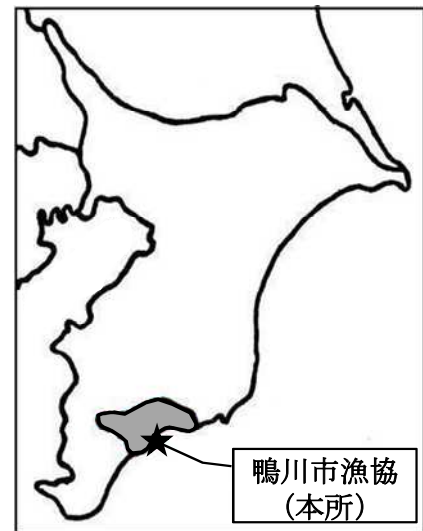


図1 鴨川市漁協の位置

2. 鴨川の漁業

漁業は、鴨川市の重要な基幹産業である。生産量の多い魚種は、カタクチイワシ、ブリ、サバなどで、アワビ、イセエビ、ヒジキなどの磯根資源も豊富である。

私の所属する鴨川市漁業協同組合は、正組合員 417 名、准組合員 856 名の計 1,273 名（平成 25 年度）で、まき網、定置網、一本釣り、刺網、採貝藻漁業など多様な漁業が営まれている。当漁協における平成 25 年度の水揚量は約 9 千トン、水揚高は約 23 億円で、県内有数の規模である。このうち、まき網と定置網で全体の多くを占めているが、一本釣り、刺網、採貝藻などの小型船漁業も水揚量約 330 トン、水揚高約 4.7 億円（全体の約 2 割）と主要な位置を占める漁業である。漁獲物についてもまき網、定置網では漁獲されない、キンメダイ、アワビ、イセエビなど鴨川の魚のバリエーションを豊かにしている。



図2 直栄丸

私（直栄丸）の1年間の操業形態は、1人乗りでキンメダイとアワビを中心とし、10月～翌年6月におけるキンメダイの一本釣りとサバ（ハイカラ釣り）、ムツ（夜釣り）などの釣り漁業や夏場のアワビを対象としたあま漁、コトジツノマタなどの採貝藻漁業、貝桁漁業によるハマグリを兼業しながら、1年を通して漁業を営んでいる（図2、3）。

漁業種類	魚種	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
釣り	キンメダイ	←————→										←————→		
	サバ	←————→											←————→	
	ムツ							←————→						
海士	アワビ					←————→								
	コトジツノマタ					←————→								
貝桁	ハマグリ											←————→		

図3 直栄丸の年間の操業スケジュール

3. 小型船漁業者への道

(1) 鴨川の漁師になるまで

私の出身地である東京都国立市は海に面しておらず、漁業がない地域であったものの、多摩川が近くを流れており、幼いころからよく釣りに行った。このような環境で育った私は、将来は川漁師になりたいと考えていた。しかし、成長するにつれ、川漁師で生活していくことは難しいことを知り、川漁師になることはあきらめたが、漁師になることをあきらめることはできなかった。地元には水産高校がなかったため、高校は大島の水産高校へ進学し寮生活を送った。入学当初は電車でも酔ってしまうほど乗り物酔いしやすかった私だが、高校の乗船実習などで、船酔いをすることは無くなっていった。また、船舶免許と無線免許も高校時代に取得した。

卒業後、希望していた静岡の遠洋カツオ一本釣り漁船へ就業することができた。その後漁業以外の仕事に就いた時期もあったが、やはり漁業がしたいという思いが強く、都内で遠洋漁業への求人登録を行った。登録後すぐに鴨川の漁業者から電話があり、鴨川に向かった。話を聞くうちに希望していた遠洋漁業ではなく、まき網漁業だと分かったが、これも縁だと思い就職することとした。

(2) まき網乗組員時代

最初は慣れないまき網漁業と土地に戸惑ったが、次第に操業のコツをつかみ、鴨川にも馴染んでいった。まき網の乗組員となった最初の年にまき網探索船の船頭にエビ網漁を見せてもらい、漁場、網の仕掛け方、さらには漁師としての心構えなどを教えてもらった。ときに厳しい方であったが、ここで教わったことが後々の自分の漁師としての技術面、精神面の根幹となった気がする。

翌年には要件が整ったことから鴨川市漁協の正組合員となった。そして自分の船外機船を購入し、エビ網漁を本格的に始めたが、エビ網は1人での操業が大変であったため、

夏場はまき網の合間に1人でも操業しやすいあま漁によりアワビを獲るようにした。また、釣り漁業にも興味があったため、ムツ夜釣りをを行う漁師の船に乗せてもらい、漁場、仕掛け、操船方法など教わることで、徐々に自分のできる漁を増やすことができた。まき網の乗組員となって5年ほど経過した頃、釣り漁を主体として、夏場はあま漁を行うことで生計が成り立つと考え、独立を意識し始めた。このとき私は探索船の船頭をしていたが、まき網船の社長に「小型船漁業者として独立を考えており、3年間しっかり引き継ぎをするので認めて欲しい。」と相談すると、社長は理解を示してくれた。

独立までの間に5トンクラスの小型船を探し、中古ではあるがよい船を購入することができた。また、道具の購入、準備も同時に始めた。まき網による収入を生活費に充て、あまによる収入は独立のための道具などに充てていた。そして、平成24年に小型船漁業者として独立を果たすことができた(表1)。

表1 独立までの年表

年	出来事
S57	東京都国立で生まれ育つ 保育園の頃漁業に興味を持つ
H10	大島の水産高校に入学
H13	高校卒業後、静岡で遠洋カツオ一本釣り漁業に就業
H16	鴨川市漁協、まき網漁業に就業(21歳) エビ網漁の手ほどきを受ける
H17	漁協の正組合員となる 船外機船を購入
H21	小型船漁業者としての独立を考え始める 夜釣りの手ほどきを受ける
H23	小型船(5tクラス)を購入
H24	小型船漁業者として独立(30歳)

(3) 独立してから

独立後、1人乗りで小型船漁業を営むためには装備の充実を図る必要があり、このときに県の沿岸漁業改善資金を利用し、大いに助かった。最初に始めた漁はムツの夜釣りである。これは前述したようにまき網乗組員時代に漁のポイントを習得していたので、初めてにしてはスムーズにできたと思う。最初の年は夜釣りが安定しており、もしこの漁の方法を知らなかったら、1年目に廃業していたかもしれない。

2年目は夜釣りの漁模様が悪く、先輩漁師に「キンメが良いから一回漁場に来てみるか」と誘ってもらえた。キンメダイ釣りは、毎日の漁の中で仕掛けの流し方や細かい操船技術などを先輩漁師に教わりながら覚えていった。ビギナーズラックなのか最初の年から大漁の時もあり、今では一番わくわくする釣りになっている。この年にはキンメダイ釣りを主体として、夏はあま漁を行う現在の年間操業のスタイルが出来上がった。また、2年目はまき網時代の収入を超えたので、新たな漁を始める準備等に資金を充てている状況である。

私は地元の間人ではないので、鴨川以外の近隣地区の漁師を知らなかったことに苦労した。特にキンメダイ釣りのような、様々な地区の漁師が同じ漁場を利用する場合は

大変であった。最初は慣れていないため漁具を他の船のものとからめてしまったことがあり、このときは、鴨川の知り合いの漁師が、相手方に連絡を取ってくれてトラブルにならないように配慮してくれた。地元で当たり前の浜のルールもわからないことが多く、このようなときは漁協や地元漁師から教えてもらった。また、資源管理の考え方などは、県の普及員から話を聞き、その重要性を感じた。

このように独立後苦労したこともあったが、漁自体は案外順調にできていると思う。これは、まき網乗組員時代に独立の準備をしていたことや周りの人の助けがあったからだと思う。

4. 鴨川での受け入れ体制

まき網・定置網の乗組員（雇用型漁業者）は、私のような漁業のない地域の出身者でも漁業を始める入口として適していると思う。千葉県における新規漁業就業者も船主に雇われる人が多く、近年の鴨川の新規就業者もすべてこのタイプである（図4）。最初から小型船等で漁業を始めることは、技術面でも資金面でも困難であるが、乗組員という立場なら、先輩から技術指導を受けやすく、給料制なので収入も安定するからである。さらに、鴨川では小型船漁業者となった例は私に限ったことではなく、比較的年が近い30～40代だと、他に5人の漁師がいる。彼らは、地元出身者ではなく県外（関東・関西地方）からの移住者で、うち4人は、まき網乗組員を経て小型船漁業者として独立した。このように鴨川では、漁師になりたい者が実際に雇われの漁師となり、さらに独立まで進むケースがある。この結果、組合員数が減少しているにもかかわらず、小型一本釣り漁業者は、近年増加しているようである（図5）。

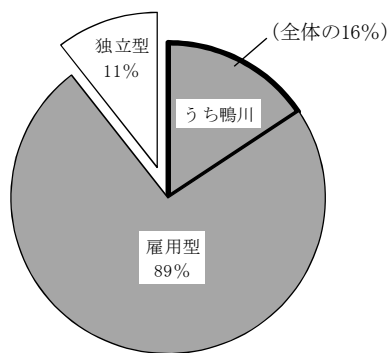


図4 千葉県新規漁業就業者における雇用形態の内訳 (H23～H25 平均)

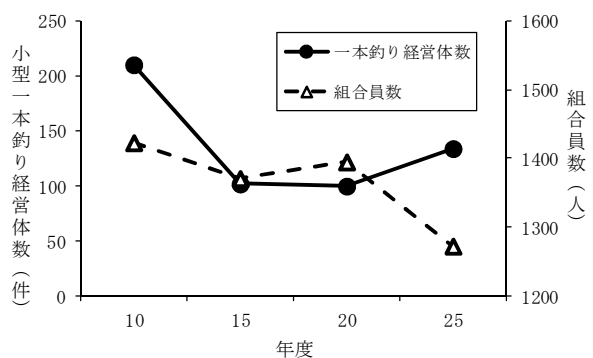


図5 鴨川の小型一本釣り経営体数と組合員数の推移

鴨川は昔からサーフィンが盛んな地であり、鴨川の自然に魅せられて移住してくるサーファーなど（図6）、都市部からの移住者が漁業に就業するというケースも多い。このようなサーファーにとって漁業は、仕事と趣味の両立ができるため（図7）、魅力的な職業の一つとなっている。このため鴨川では、毎年新規漁業就業者がおり、近年では少ない年で10人前後、多い年で30人以上が漁業者になっている。さらに新規

漁業就業者の1年後の定着率は過去5年平均で70.2%であり、千葉県平均の60.4%よりも約10%も高い数字になっている。

漁協は後継者作りに積極的であり、自営定置部の平均年齢は39.8歳（平成25年末）と、30代以下の若い世代が多い。また、まき網・定置網の乗組員についても要件が整えば漁協組合員として受け入れてきた。組合員となれば、あま、刺網などの漁が可能となり、収入の安定や増加につながる。さらに漁協は漁業のルールに関することなどわからないことを教えてくれる他、新しい漁をするときは、そのグループの長を紹介してくれるなど、様々な面で手助けしてくれ、漁業を行いやすい環境が整っている。

地元漁師においても若手漁師の独立を応援してくれる指導・青年漁業士の存在があり、彼らを仲立ちにして、他の経験豊かな地元のベテラン漁師たちとも交流を持つことができる。実際に私も指導・青年漁業士には独立までのさまざまな面で相談にのってもらい、技術指導もしてもらった。このような地域外の人を受け入れる風土は都市部からのサーファーなどが多いことと関係しているように思う。鴨川の漁師たちは、やる気のある漁師なら、自分の船に乗せ、漁のやり方、水揚げのやり方などいろいろ指導してくれる。

5. 今後について

私は、鴨川では、まき網、定置などの雇われる形での漁業があることと共に、地元漁協・漁業者など地域として漁師になりたい人を受け入れてきた結果、新規漁業就業者や、小型船漁業者として独立する漁師の多さにつながっていると考えている（図8）。今年に入ってから、漁協は若手漁業者の多さなどからテレビ局や新聞社から数件取材を受けており、鴨川におけるこのような一連の就業スタイルは注目されているようである（図9）。

私はいろいろな巡り合わせもあり、鴨川で小型船漁業者として独立することができた。



図6 鴨川のサーファー漁師
(上野敏彦氏 提供)

時	海上作業	陸上作業	休日
0	起床・準備	就寝	就寝
6	操業 (沖で朝食)	起床・準備	起床・準備
	サーフィン等	陸上作業 (網手入れ等)	サーフィン等
12	昼食	昼食	昼食
	サーフィン等	サーフィン等	サーフィン等
18	夕食	夕食	夕食
	就寝	就寝	就寝

図7 サーファー漁師（まき網に従事）
のスケジュールの一例

一方、他地区をみると、小型船漁業者の数は減少しているところが多い。私は、このまま小型船漁業を衰退させたくないという思いから、就業の流れが他の地区へも広がることを願っている。

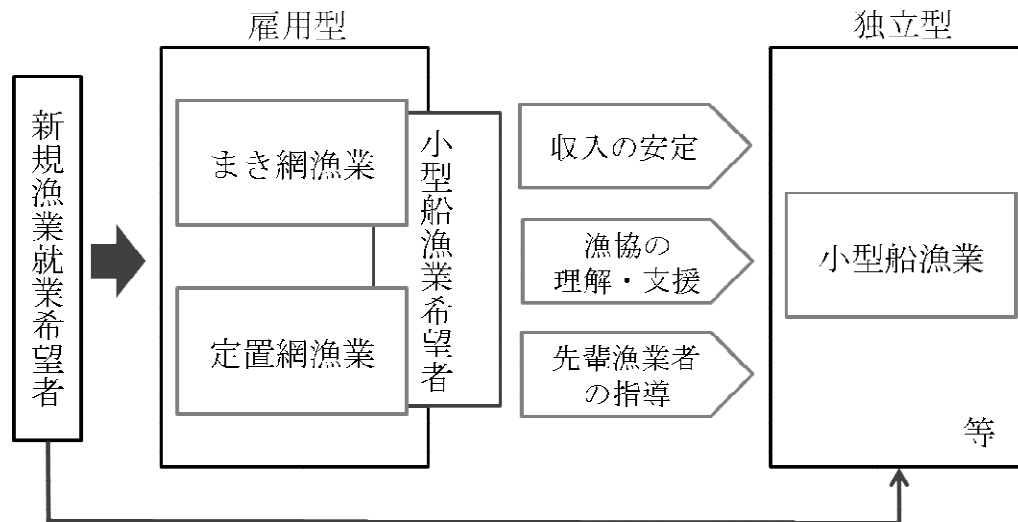


図8 鴨川における漁業就業の流れ

また、漁師を増やすためには漁師のイメージを変えることも大事だと思っている。よくテレビで放送されている漁師はいわゆる3Kというイメージだが、実際はもっと違っている。現代の漁師は上手な人ほどスマートに漁をしていて、生活も充実しているように見える。私はまだ漁師としては駆け出しで、必死に毎日過ごしているが、いつかは他の人にも小型船漁業をやりたいと思ってもらえるような稼げる漁師になりたいと思っている。今後は自分の漁の引き出しを増やし、稼げる漁師になるためにもカツオ曳き縄、カジキ縄など未経験の漁にもチャンスがあればチャレンジしていきたい。私は鴨川に来ていろいろな方に会い、そして助けられてきた。これからも感謝の気持ちを忘れずに、今後は地元での若手漁師の育成や県の漁業研修制度などの受入側としても積極的に関わっていき、鴨川に少しでも貢献できればと思っている。



図9 若手漁業者への取材の様子